

会議名	第 2 回 ブロック会	<input type="checkbox"/> 全体会 <input checked="" type="checkbox"/> ブロック会 <input type="checkbox"/> 執行部会
開催日	平成 24 年 9 月 28 日(金) 14:00 ～ 17:00	
場所	横浜市山内地区センター集会ホール C	
参加者	青葉の丘、ウェルケア新吉田、うしおだ老健やすらぎ、神奈川苑、希望の森、千の風・川崎、ソフィア都筑、 たかつ、都筑シニアセンター、ナーシングプラザ港北、ヒルトップ池辺、遊花園、横浜シルバープラザ、 リハビリゾートわかたけ、レストア川崎、ろうけん宮前、若葉ヶ丘、南大和老人保健施設さくらぷらざ <div style="text-align: right;">以上 18 施設 25 名 記録:澤田(希望の森)</div>	
内容	<p>司会・進行: 山根氏 (遊花園)</p> <p>1.開催の挨拶 鹿田氏 (青葉の丘)</p> <p>2.講義 テーマ:「人生の最終章を考える」～支援相談員に求める事～ 講師: 篠田富子氏 (青葉の丘 生活部長)</p> <p>I グループワーク 各グループで進行、記録、発表の三役を決める。</p> <p>(1).他己紹介 各グループで「右側」をテーマとして五分間雑談をする。その後、自分の右側の参加者を一分間で他己紹介していく。五分間で情報を得ていくことの難しさ、他己紹介の難しさを体感する。</p> <p>(2)施設の名前を決める 各グループを老健に見立て、各々で施設の名前を話し合っ決定する。決定した施設名を発表役が発表する。</p> <p>(3)演習 老健にある相談者が入所相談に来所したとする。講師が相談者の状況を説明し、参加者はメモを取らずにこれを聞く。説明が終わったら各グループでグループワークを行う。</p> <p>【ケース概要】 94 歳母親の入所相談で娘の十文字様(70 歳台)が来所した。施設最寄りのバス停を降りてからは迷いながら施設に到着した。 母親は現在目黒区内の施設に入所中で、入所が 4 ヶ月目になっているため退所指導を受けている。本日は二軒目の施設訪問で、トータルで七件目の訪問である。 母親は夫を四年前に亡くし、以来認知症を患ってきた。十文字様は二年間母親と同居していた。その間、弟の手伝いは少々あった。転倒による大腿骨骨折のために母親は施設で生活するようになった。 現在母親の食事はミキサー食で摂取にも介助が必要な状態。加えて摂取量が少なく、又、血液検査の数値もよくない。 これまで相談に行った施設では、都内で施設を探すことは無理とされたり、療養病院に入院することを勧められたりしている。何とか入所できる施設を見つけたくて、東京都以外の施設も探しているところである。</p> <p>【演習内容】 講師が説明後、各グループで次の事項について意見を出し合い発表する。 ア.相談者はどのような人であったか 情報をとる難しさを体験する。</p>	

<p>内容</p>	<p>イ.相談員が十文字様にかける第一声は何か  まず相手を気遣う言葉をかけているか。突然名刺を慇懃な態度で差し出すような対応はしていないか。</p> <p>ウ.相談者の主訴は何か  エ.相談員として何を知りたいか  オ.相談員が相談者に与えられる情報は何か  カ.入所の可否についてどう考えるか</p> <p>II.講義</p> <p><b><u>高齢者に関する理解</u></b></p> <p>(1)昨今の社会的背景  ア.日本における高齢者に関する数値  ・平均寿命 男性:約 79 歳 女性:約 86 歳 ・高齢化率:約 24%  ・高齢者数:約 3000 万人 ・介護認定を受けている人数:500 万人弱  ・要介護 3 以上の割合:介護認定を受けている人の約 50%  イ.考え方の変化  死について考えることが一般化してきている。例えばお墓や柩に関するイベントが開催されたり、死をテーマにした商品が売れたりしている。また、自治会で死をテーマにした講座が開かれ、参加者が多数集まっている。</p> <p>(2)死に関する現状  多くの人が自宅で最期を迎えたいと考えている。しかし、高度経済成長期を堺に自宅で亡くなる人の割合と病院で亡くなる人の割合は逆転し、近年では病院で亡くなる人の割合の方が圧倒的に高い。</p> <p>(3)高齢者に対する理解  ア.高齢者の特徴  ・個人差が大きい ・病が多い ・記名力が低下する ・嚥下機能が低下する ・不眠になりがち  ・転倒しやすくなる ・脱水になりやすい ・薬の副作用の影響を受けやすい  イ.加齢の進行  加齢の進行は赤ちゃんが成長していく過程と逆である。終末期に近づくにつれて歩くことが難しくなり、柔らかいものでないと食べられなくなってくる。その他、諸機能が低下していく。  病気と老化は全く別物である。病気は治療により治る。しかし、老化は治療しても治らない不可逆的なものである。これを入所者のご家族は理解しているか注意しなくてはならない。ご家族には入所者の今を伝えていかなくてはならない。そうでないと誤解を招いてしまう。  生はヘリコプラーの軌道に例えることができる。出生とともに徐々に高度を上げ、終末期は高度を下げていく。着陸態勢に入っている時期(死が近づいている)を理解できているだろうか。着地点(終末期のむかえ方)を決めることができているか。</p> <p><b><u>青葉の丘の取り組みについて</u></b></p> <p>(1)取り組み  家族会を開催し、家族間でコミュニケーションを図れるようにしている。家族会がきっかけになり、ご家族の方がボランティアで喫茶店を開くようになった。  方向性の決定は家族の中で話し合いによりじっくりと決めていただくようにしている。また、変更も可能としている。</p>
-----------	---

## 内容

入所の際に相談員が緊急時は延命を希望するのか、自然な形を希望するのか聞き取り、話し合いを行う。この場に篠田氏が入ることもある。

### (2)看取りに関する取り組み

青葉の丘では、いよいよ終末期を迎えるタイミングでご自宅に戻っていただいている。最期をご家族で看られるようにするための取り組みである。平均して、自宅に戻ってから一週間程度で最期を迎えられている。

もともと自宅での看取りを考えていたご家族は少ない。しかし、看取りをしたご家族の方の満足度は高い。現在は入所者のご家族のうち、半分が自宅での看取りを希望している。

相談員が居宅のケアマネージャーや医師、訪問看護などを手配している。在宅のケアマネージャーからは、短期間のみの対応はできないと非難がある。特にこの取り組みを始めた当初は対応してくれる事業所を探すことに苦労をした。しかし、粘り強く働きかけることで理解を示してもらえるようになった。

### (3)事例紹介

写真による経過の紹介。要介護4、大正9年生まれの女性。平成24年8月15日に自宅に戻り、同月20日ご逝去。

## まとめ

死は親が子に行う最期の教育である。死とは何かを体現している。「介護」は「廻互」と書き換えることができる。誰にでも廻ってくるものである。

「 $99-1=0$ 」、「 $50+1=100$ 」。これらは「おくりびとの計算式」である。どんなにいい人生でも最期が悪くなければ人生は良いものとして終わらない。逆にそれまでの人生が決して良いものでなくても、最期が良ければ人生はよいものとして終わる。

相談員は情報を扱う仕事である。情報とは「情(なさけ)を報いる」ことである。現在の社会は情を感じにくい乾いた社会と言える。愛、友、熱に「情」をプラスして社会に潤いを与えてほしい。

## 3.質疑応答

問:

いよいよ最期を迎える段階で自宅に帰す取り組みをしてきたとのことだが、どんな苦労があったか。

答:

特に取り組みの開始当初は居宅のケアマネージャーから理解を得ることができなかった。在宅復帰が決まった段階で自宅に戻る日程を決めるべきだとされたり、短期間のみの対応は不可とされたりした。しかし、何度も挨拶に行き説明を行った。

問:

終末期の方向性を決める聞き取り、話し合いに篠田氏が参加するとのことだが、どの程度参加するのか。

答:

必要に応じて参加するようにしている。

## 4.事務連絡

- ・現任研修について
- ・第三回ブロック会について
- ・懇親会について

平成 24 年 9 月 28 日

## H24 年度 支援相談員部会 北ブロック アンケート

回答総数：21 名

(1) 今回の研修内容は、今後の実践で役立つと考えますか？

.1 役立つ	.2 どちらともいえない	.3 役立たない
16 人	5 人	0 人

回答理由

### 【役立つ】

- ・ 終末期の選択しの 1 つとして考えていきたいと思う
- ・ 今後、在宅での看取りを増やしていきたいと考えていたから
- ・ 相談員としての心構えとして忘れてはならない姿勢について再度、確認できた
- ・ 他施設の取り組み・対象についての視点を改めて考えさせられた
- ・ 講義だけでなく、グループ演習があり非常に盛り上がった
- ・ こういった在宅復帰の形もあるのだと知った
- ・ 看取りを検討していたので、実際に行っている施設の話が聞けて良かった
- ・ 老健の役割や受け入れ条件ばかりを気にしていた自分が恥ずかしくなった
- ・ 相談員として何が大切なのかを再確認できた
- ・ 元気な人だけが在宅復帰の対象だと考えていたので、視野が広がった
- ・ 家族に提案する選択肢に在宅で看取りがなかった事に気付いた
- ・ 個人的な業務の確立・手法としては大変役に立った
- ・ 今日の内容を基に、在宅の看取りを希望しながら一歩が踏み出せない家族へのアプローチ・支援が出来たらと考える

### 【どちらともいえない】

- ・ 施設の方針を考えると、難しいところもあるが、参考にしたい
- ・ 在宅での看取りという考えに、個人的に違和感がある
- ・ 自施設では看取りを行っていないが、知識にはなった

(2) 研修内容は理解出来ましたか？

.1 理解出来た	.2 どちらともいえない	.3 難しい
21 人	0 人	0 人

回答理由

【理解できた】

- ・対象者をわが身に置き換え、自身ならどうするか？と言う事を念頭に置きながら、業務にあたっていきたい
- ・自身も含め、自宅での最期を望んでいるという事実を受け止め、家族の支援にあたりたい
- ・事例ケースを交えての内容で解り易かった
- ・最期の場所是在宅が良いに決まっているし、それを叶えたいと思う
- ・事例で使用した写真の顔が安らかで、充実した実際を見れたと思う
- ・初心に戻り、業務にあたりたい
- ・3ヶ月での在宅復帰に限界を感じていたので、とても有難いお話でした
- ・新鮮な情報をキャッチする為に、アンテナを張っていないと痛感しました

(3) 研修の時間配分は如何でしたか？

.1 丁度いい	.2 どちらともいえない	.2 わるい
20 人	0 人	1 人

回答理由

【丁度良い】

- ・テンポよく引き込まれた
- ・丁度良かった
- ・最期まで集中できた
- ・前半が少し疲れた

【わるい】

- ・個人的にはもっと話を聞きたかった

(4) 感想

- ・施設で管理栄養士をしています。日頃の業務に追われる中で、自身の行っている事に矛盾を感じる事もありましたが、今回、自身の路線を再確認できました
- ・いつもの仕事を見直したいと本気で思いました
- ・改めて、人の気持ちに寄り添うという事を考える事が出来ました
- ・自宅で看取するという事実に向き合う準備段階が大切なんだと知りました
- ・自施設の職員研修において頂ければと思います

- ・ 相談員として・個人として支えたいという立場と、施設方針・リスクマネジメント・判定会のハードルや条件に矛盾を感じ、葛藤していたので、大変参考になりました
- ・ 相談員として根本的な事を再確認できました
- ・ 他施設の多様な取り組みに驚きました

以上